

## 〔梅園日記〕勸學院雀

勸學院雀嘽蒙求といへること、寶物集八幡愚童訓等に出たり、富樫の舞、頼政の謠にもいへり、曾我物語にも、勸學院の雀とかや申ければ、などあれば、久しき諺なり、日本國風勸學院雀の一條に、閑窓倭筆を引て云、雀とは勸學院に仕れて、水を汲、薪を運ぶ小女の名也、其女此勸學院にて、朝夕學問する人の蒙求を誦を聞て、常に口まねをする故に、雀の名にたよりて嘽といふ也、按に勤勵讀書の聲を、雀も聞覚えて、王戎簡要など、嘽やうに、きかる、なるべし、以上日本國風按するに、閑窓倭筆に、又云、古來蒙求抄の題注にいへる、蒙求の作者の李瀚がつかふ女の名を雀といふ、それまでが此蒙求を嘽と云とあり、甚非也、古來の抄とは蒙求聽塵にとあり、今考るに、蒙求の開卷に載たる、李良が薦蒙求表に、李瀚撰古人狀跡、編成音韻、名曰蒙求、瀚家兒童、三數歲者皆善諷誦とあり、瀚家兒童云々をつめて、瀚が家の兒童は蒙求をさへづると、ふるき諺にいひしなるべし、唐人などのものいふをば、さへづるといへれば也、さるを後に、瀚が家を、勸學院と誤り、さへづるといへるより、兒童を雀と誤たる也、又宋の方岳が詩に、黃鸝を教得て書を讀ことを解せしめ、能蒙求中の一句を記せしむと、いへる句なども混じたるにや、方岳秋崖集、獨立詩に、村夫子挾兔園冊、教姪可憐、渠、自注に、蓋俗以其聲爲呂望、非熊、此詩こい、早く傳、得黃鸝、解讀書、能記蒙求中之一句、百盤嬌はりしなるべし、月舟が爲誦蒙求詩、翰林五鳳集に見えたり、されば倭筆に引たる古抄の説、や、是に近しといふべし、

## 〔山陽遺稿〕捕雀説

雜十

雀、小黠、善畏、望食、而不敢下、鴉多智、善就利、避害、鴉之所在、雀則下之、故捕雀者、以鴉爲招、繫鴉之足、環散粟、而隱網其傍、鴉俯啄粟也、群雀望視之、噴喑然、蓋相告曰、彼在焉、我可以往也、連翼而下、百啄喧爭、而網已掩之矣、嗚呼、彼自謂智且巧、莫或敢侮予、而爲食繫其手足、貪戀不能自脫、而視之者、不以爲可憫、而以爲可與歸、胥溺於禍機、而兩不悟也、可不哀哉、